OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	章学誠における経書の位置
Author(s)	黒田, 秀教
Citation	待兼山論叢. 哲学篇. 2003, 37, p. 31-44
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/5574
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

章学誠における経書の位置

黒田秀教

はじめに

考証学が全盛を極めた清朝乾隆・嘉慶年間に、考証学を批判した学者がいた。章学誠、字は実斎、浙江会稽の人である。章学誠は乾隆三年に生まれ、乾隆四十三年に進士に登台するが、官途には就かず、地方官の幕僚として生涯を過ごし、嘉慶六年に世を去った。その学説として、経書は全て史書であるとする「六経皆史」説が有名である。

章学誠は経書を全て史書と定義した。では章学誠は、従来経書が持っていた権威を否定して、経書を『史記』などの後世の史書と、同列に並べてしまったのだろうか。また、経書が史書であるならば、経学は経学以外の学問とどういう関係を持つと考えたのか。先行研究によっても、この問題は充分に解明されていない。「六経皆史」の文句が一人歩きし、経書を史書の位置に引き下げたのだと考えられがちである。そこで本論は、この問題について考えることとする。方法として、先ず、章学誠が経書の起源についてどう考えていたかを確認し、章学誠の想定する経書と後世の史書との関係について考察する。次に、経書が作成された時代の学問形態とそれ以降の学問形態との相

違について、章学誠がどのように考えていたのかを確認し、章学誠が経書と諸子百家との関係をどう考えていたかを考察する。そしてその結果を踏まえ、章学誠が「六経皆史」説に経書の権威を組み入れた意図を、章学誠の生い立ちより考える。(1)

一、経書の起源

初めに、章学誠が経書の起源をどのように考えていたかを確認する。章学誠は、孔子の時には、「経」という名はなかったと、次のように言う。

> 此れ六芸の官守を失うと雖も而て猶お頼みて師教有るがごときの所以なり。然れども夫子の時、猶お経と名けず。(『文史通義』「経解上」)

そして、「経」という呼称は、孔子以後の儒家が付けたと次のように言う。

> 儒家者流は乃ち六芸を尊び、而て奉じて以て経と為す。(『文史通義』「経解上」)

ここに言う「六芸」とは経書のことである。では、「六芸」とは何に由来するのか。章学誠は次のように述べる。

> 六芸　孔氏の書に非ず。乃ち周官の旧典なり。(『校讐通義』「原道」)

「六芸」とは孔子の製作したものではなく、「周官の旧典」であるとする。また次のようにも言う。

夫子　周公の道を尽くして其の教を万世に明かにす。夫子　未だ嘗て自ら説を為らざるなり。六籍を表章し、周公の旧典を存す。故に曰く、「述べて作らず、信じて古を好む」と。（『文史通義』「原道中」）

「六籍」は「六芸」のことである。孔子は「六籍」を表彰して「周公の旧典」を伝えたのだと言う。ところで、伝統的に、『春秋』は孔子の筆削を以て成立したとされている。では、章学誠は、『春秋』の成立についてどう考えていたのか。それを次に挙げる。

昔　夫子の『春秋』を作るや、筆削既に具わり、復た微言大義を以て、其の徒に口授す。（『文史通義』「史注」）

章学誠も、やはり『春秋』は孔子の筆削によって成立したものだと言う。では、この『春秋』は「周公の旧典」に含まれるのだろうか。章学誠は次のように言う。

夫れ『春秋』は乃ち周公の旧典なり。（『文史通義』「易教上」）

章学誠は、『春秋』も「周公の旧典」だとする。章学誠は、孔子と周公との関係について次のように言う。

或るひと問うならく、何を以てか一言にして孔子を尽くすや、と。則ち曰く、周公を学ぶのみ、と。周公の外、別に学ぶ所無きか、と。曰く、学ぶこと有るに非ず。而して孔子　至らざる所有り。周公　既に群聖の成を集むれば、則ち周公の外、更に所謂学ぶこと無きなり。周公　群聖の大成を集む。孔子　学びて周公の道を尽くす。斯の一言や、以て孔子の全体を蔽うに足る。「堯・舜を祖述す」とは、周公の志なり。「文・武を憲章す」とは、

周公の業なり。一つしては則ち曰く、「文王 既に没し、文 茲に在らず」と。再びしては則ち曰く、「甚だしきかな吾の衰えたる、復た夢に周公を見ず」と。又た曰く、「吾 周の礼を学ぶ、今 之を用う」と。又た曰く、「郁郁乎として文なるかな、吾 周に従わん」と。哀公 政を問えば則ち曰く、「文・武の政、布きて方策に在り」と。或るひと問うならく、「仲尼 焉くにか学ばん」と。子貢 以為えらく、「文・武の道 未だ地に墜ちず」と。「述べて作らず」とは、周公の旧典なり。「古を好み敏に求む」とは、周公の遺籍なり。（『文史通義』「原道上」）

孔子は周公に学び、周公の外に学ぶことはなかった。『礼記』「中庸」に「仲尼 堯・舜を祖述し、文・武を憲章す。」とあるが、「堯・舜を祖述」し、「文・武を憲章す」ることは、そもそも周公の志であり、事業であった。このように述べる章学誠にとって、孔子の学は周公の道から踏み出ることはなく、孔子の著述も「周公の旧典」となるのである。また周公は周の制度を作った人物とされる。周の官制も周公の事業の一つであり、周公の道に出る。だから章学誠にとって、「周官の旧典」は「周公の旧典」である。章学誠は、経書の起源を周公に求めるのである。

では、その周公の生きた周代を、章学誠はどう考えていたのか。それを次に挙げる。

羲・農・軒・顓の制作、初め意 是くの如きに過ぎざるのみ。法は積み、美は備わり、唐・虞に至りて善を尽くす。殷は因り夏は監み、成周に至りて憾み無し。（『文史通義』「原道上」）

上古より法や道徳が次第に積み重なり整えられていき、遂に周代は、政治体制も道徳も完全無欠の状態を迎えたとする。では、周以後はどうであったとするのか。

百家雑出して道を言うに至りて、儒者は自ら其の出づる所を尊ばざるを得ず。一つしては則ち堯舜の道を曰い、再びしては則ち周公・仲尼の道と曰う。故に韓退之「道と徳と虚位為り」と謂えり。夫れ道と徳と虚位為るは、道徳の衰えたるなり。（『文史通義』「原道中」）

諸子百家の時代を迎えると、道徳は衰えていったとする。これは一種の下降史観である。

章学誠にとって、経書は、政治体制や道徳が理想状態にあった時代に起源を持ち、その時代の事を記している。つまり章学誠にとって、経書は理想時代の事を載せた史書である。これに対して『史記』を始めとする後世の史書は、政治体制や道徳の衰えた時代の事を載せる。経書に理想状態の道徳が示されているとし、また周代を理想時代とみなす姿勢は、典型的な儒家のそれである。章学誠は経書を史書と定義する。しかし、経書と後世の史書とには、そこに示されている道や道徳に決定的な差異が存在すると考えていたのである。

二、経書と諸子百家との関係

前節で述べたように、章学誠は、経書は全て史書であるとしながらも、経書は理想時代の事を載せた史書として、後世の史書と一線を画す地位を経書に与えていた。本節では、経書の起源である周代と周代以降との学問形態について章学誠がどう考えていたかを確認して、章学誠における経書と諸子百家との関係について考察する。

周代の学問形態について、章学誠は次のように言う。

以て学校の設、四代に通ずるに至る。司成師保の職、周官に詳らかなり。然れども既に有司に列すれば、則ち

肄業は掌故に存す。其の習う所の者は、修斉治平の道にして、師とする所の者は官を守り法を典(つかさ)どるの人なり。治教は二無く、官師は合一す。豈に空言もて以て其の私説を存すること有らんや。(『文史通義』「原道中」)

章学誠は「官師合一」を理想の学問形態とする。秦の焚書坑儒についてさえ、そこに「官師合一」を見いだして一概に否定しない程である。[2] では章学誠は、周代以後の諸子百家の時代をどのような目で見ていたのか。それを次に掲げる。

三代以後、官師分かれて学士始めて著述を以て一家言を為す。(『文史通義』「為謝司馬撰楚辞章句序」)

周代以後、官と師とが分離して、学者が各々著述をなすようになったとする。また次のようにも言う。

諸子百家、大道に衷らざるも、其の之を持するに故有りて之を言いて理を成す所以の者は、則ち本原の出づる所、皆な周官の典守に外ならざるを以てなり。(『文史通義』「易教下」)

諸子百家の源流は「周官の典守」であると言う。そしてその周官が保持していた典籍が、「周官の旧典」即ち「周公の旧典」であり、孔子の手を経て後の儒家によって「経」とされるものである。諸子百家が周官を源流に持つとする思想は、『漢書』「芸文志」九流十家の説に基づいている。また、章学誠は次のようにも言う。

後世の文字、必ず六芸に遡源せん。(『校讐通義』「原道第一」)

思想のみならず、あらゆる文章もまた経書より出ているとするのである。

章学誠は経書を全て史書としたが、しかし単なる史書の地位に経書を落としはしない。章学誠にとって、経書とは学問や文章の源流だったのである。これもやはり、典型的な儒家思想であろう。また諸子百家の源流を周官に求めることも、特に章学誠の立てた新説ではない。経書と諸子百家との関係という視点からみても、やはり章学誠は儒家の常識を外れることはない。

三、章学誠の経書観の形成

前節までで確認したように、章学誠は、経書は全て史書だとしながらも、経書は理想時代の事を載せた史書であり、道徳が衰えた時代の事を載せる後世の史書とは一線を画すものだとし、また、経書は学問文章の源流であると考えていた。これは、典型的な儒家の経書観である。では、経書を全て史書だとする衝撃的な主張を唱えながら、何故章学誠は経書の権威を否定しなかったのか。本節では、章学誠の生い立ちからこの問題について考えてみる。

章学誠は、もともと愚鈍であったと自ら次のように言う。

> 二十歳以前、性 絶えて駑滞、書を読むこと日に三二百言を過ぎざるも、猶お久識する能わず。(『文史通義』「家書六」)

そんな章学誠にも、次のような転機が訪れる。

廿一二歳、駸駸向長す。縦いて群書を覧み、経訓に於いては未だ領会を見ざるも、史部の書は乍ち目に接して、便ち夙に攻習する所の然き者に似たり。其の中の利病得失、口に随いて能く挙げ、挙ぐれば輒ち当たれり。（『文史通義』「家書六」）

二十一、二歳になると、相変わらず経部のものは苦手であったが、しかし史部の書は得意だったと言う。もっとも、史学への興味はもともと厚かったようで、次のように言う。

吾 十五六歳にして甚だ駑滞と雖も、而して趣を識れば則ち紙筆を離さず。性情 已に史学に近く、塾課の余暇、私かに『左』・『国』諸書を取り、分かちて紀・表・志・伝を為し『東周書』を作す。（『文史通義』「家書六」）

章学誠は、幼児より経学は苦手であって、史学に偏重していた。では、若き日の章学誠は、どのような目で経書を見ていたのか。それを次に掲げる一節に見てみよう。

経史子集、久しく四庫に列せらるるも、其の始めを原ぬれば亦た遠きに非ず。試みに六芸の初めを論ずれば、則ち経の目 本より有る無きなり。『大易』は聖人の書なるを以て之を尊ぶに非ず、一の子書なるのみ。『書』と『春秋』とは両びて史籍なるのみ。『詩』三百篇は文集なるのみ。『儀礼』・『周官』は律令会典なるのみ。自りて『易』の太卜に蔵せらるるの外、其の余の四者、均しく柱下の籍に隷せらる。（『校讐通義』「駁文選義例書再答」）

山口久和氏は、この「駁文選義例書再答」を章学誠二十七歳の時のものとする。[3] この頃の章学誠の経書観は、五十歳頃以降とは異なっている。経という分類がもともとは存在しないとする点は、同じである。しかし、二十七歳当事の章学誠は、経書を全て史書だとは考えていない。『尚書』と『春秋』は史書だとするが、『周易』は子書であり、『儀礼』と『周礼』は律令会典であり、『詩』は文芸作品だとする。山口氏はこの「駁文選義例書再答」を挙げて、『漢書』「芸文志」が章学誠の発想の原点だと指摘している。[4]

「官師合一」を理想の学問形態とする思想は、三十代半ばには固めていたようである。それを次に挙げてみる。

> 三代の盛んなるや、法は書に具わり、書は之が官に守らる。天下の術業、皆な官師の掌故に出で、道芸 此こに於いて斉しく、徳行 此こに於いて通ず。天下 文を同じくするを以て治を為す所以なり。而して周官六篇、皆な古人の官守に即きて師法を存する所以の者なり。(『和州志』「芸文書 原道」)[5]

『和州志』は、章学誠三十六歳の時に編纂を始め、翌年中断したものである。[6] ここで章学誠は、三代（夏・殷・周）では、天下の術業は官によって掌握され、学問道徳は理想的な状態であったとする。一方、周以後に官と師とが分離して、個人が著述をなし様々な学説をうち立てていったことについては、次のように述べる。

> 三代より後、文字 職司に隷せず。是に於いて官府の章程、師儒の習業、分かれて二と為る。以て人をして自ら書を為さしめ、家をして説を為さしむ。蓋し泛濫して百司の掌故の外に出る者、遂に粉然なり。(『和洲志』「芸文書 原道」)

章学誠が初めて『史通』を読んだのは二十八歳の時である。(7) また、章学誠が『文史通義』を書き始めるのは、三十五歳の時である。(8) 章学誠の歴史観は、遅くとも二十歳代後半から三十歳代前半というごく初期に形成されている。そしてその過程で、章学誠が経書の権威を否認した痕跡は見られない。章学誠は、経書の権威についての常識的な立場を守り、それを越えることはなかったのである。ならば、章学誠が晩年に「六経皆史」説を熟成させた時、そこに経書の権威が燦然と存在するのも当然である。ではそもそも、経書を尊重していた章学誠が、経書を全て史書だとしたのは何故だろうか。それを次に考えてみる。

章学誠は『史通』を読み、次の言を発している。

> 吾 史学に於いて、蓋し天授有らん。自ら凡を発し例を起こすを信じ、多く後世の開山を為さん。(『文史通義』「家書二」)

自分には天から授かった史学の才があると言うのである。また章学誠は、学者は各々の性分にあったことを研究するべきであると、次のように言う。

> 人 生まれて全才を得難しといえども、天に得る者必ず近き所有り、学者 自ら知らざるなり。博覧 以て其の趣の入る所を験し、習試 以て其の性の安んずる所を求め、旁通 以て其の量の至る所を究む。是れ亦た以て道に進むに足る。今の学者は則ち然らず。天質の近き所を問わず、心性の安んずる所を求めず、惟だ風気の趨く所を逐い、当世の尚ぶ所に徇い、勉め強いて之を為むるは、固(もと)より已に人に若かず。(『文史通義』「答沈楓墀論学」)

人はそれぞれ適性を持って生まれ、それを活かせば、「道」へと進んでいけるとする。章学誠の生きた時代に盛んだった学問は、経学である。しかし章学誠は経学を苦手としてこれに携わらず、興味があり才能を自覚していた史学を攻究した。その経緯を考えると、「答沈楓墀論学」で言うことは、章学誠が自分自身への弁護を行ったものとも読みとれる。史学の才を自認して史学に携わる章学誠は、己の適性を知らずに経学のみに携わろうとする世の学者と違って、「道」に進んでいける。

また、章学誠は『文史通義』「浙東学術」で虚構の系譜を築き、己の学統を誇示する。(9) 己の学問に大きな自負を抱く章学誠は、史学を経学と同等、或いはそれ以上の価値ある学問と位置づけなければならなかった。

そのためには、二つの手段があり得ただろう。一つには、従来の経書の権威を否定し、史学を頂点とした全く新たな学問体系を構築することである。二つには、経書は実は史書であるとして、経学の権威をそのまま史学に引き込んでしまうことである。章学誠の「六経皆史」説は、後者の手段を選んだものと言えよう。このように考えるならば、次のことを合理的に説明できる。即ち、章学誠の「六経皆史」説は、従来の儒家の常識を打ち破り、経書の権威を否定していく可能性を秘めていた。例えば、章炳麟は、経書を純然たる史書とし、経書に込められているとされてきた義を否定した。(10) しかし章学誠は、自らの学説をその方向には発展させなかった。それは、己の得意とする史学を権威付けるために、経書の権威が必要だったからであり、経書の権威を否定することは、史学の地位を高めんとする章学誠の目的に叶わなかったのである。

おわりに

章学誠にとって、経書は全て史書であるものの、理想時代の事を載せたものであり、後世の史書よりも価値の高いものであった。また、経書はあらゆる学問・文章の源流でもあった。経書を他の史書よりも価値の高い、権威あるものとみなす点において、章学誠の経書観は儒家の常識から外に出ることはない。ただ章学誠は、経書が伝統的に保持していた権威をそのまま史学の内部に組み込んだのであった。その意図は、史学に絶大な権威を与えるためではなかったろうか。

本論は章学誠の「六経皆史」説における経書の権威について中心に論じた。章学誠は、「六経皆史」説以外にも性情についての説など特色有る学説を唱えている。それらの学説において、経書の権威がどのように扱われているのか。また、章学誠の唱えた「六経皆史」説は、本論で述べたように経書の権威に依拠したものであったが、章学誠以後の「六経皆史」説は、何故経書の権威を否定していったのか。これら問題については、今後の課題としたい。

注

（1）章学誠の主著『文史通義』と『校讐通義』とには、大梁本・嘉業堂本という二系統の版本がある。本論では、嘉業堂本系に属する『章学誠遺書』（文物出版社 西暦一九八五年）を底本とした。なお、章学誠の六経皆史説の中核を伝える『文史通義』内篇の多くは、章学誠五十歳前後以降に書かれている。本論で章学誠の「六経皆史」説と呼んでいるのは、その章学誠五十歳前後以降の晩年の定論である。

（2）「秦人 詩・書を偶語するを禁じ、而して云えらく、「法令を学ばんと欲すれば、吏を以て師と為せ」と。則ち亦た

道器合一、而して官師治教、未だ嘗て分岐して二と為らざるの至理なり」（『文史通義』「原道中」）

（3）山口久和『章学誠の知識論』（創文社　西暦一九九八年）百五十五頁の注一。山口氏は、「与甄秀才論文選義例書」の嘉業堂本『章氏遺書』目録の割注より、「答甄秀才論修志第一書」・「答甄秀才論修志第二書」・「駁文選義例書再答」・「与甄秀才論文選義例書」を、同時期のものとする。そして胡適が「答甄秀才論修志第一書」・「答甄秀才論修志第二書」を章学誠二十七歳の時としていることから、「駁文選義例書再答」も章学誠二十七歳の時と比定する。本論も山口氏に従う。

（4）山口氏前掲書、百五十二頁参照。

（5）『章学誠遺書』の外篇に収められている。また、山口氏はこの『和州志』を、官と師とが分かれてから学問が下降していくとする章学誠の史観が述べられる資料の内、最も早いものだとしている。

（6）胡適『章実斎先生年譜』による。本論では遠流出版事業股份有限公司　胡適作品集第三十三巻　民国七十五年（西暦一九八六年）を用いた。

（7）「其の実、吾の史通を見るは已に廿八歳なり。」（『文史通義』「家書六」）

（8）胡適『章実斎先生年譜』による。もちろんこの段階の『文史通義』構想が、後の『文史通義』と同じであるとは限らない。しかし、この時期に自分の学説に自信を持っていたであろうことは推察される。

（9）山口氏前掲書、第二章第一節参照。

（10）『国粋学報』第二十期「諸子学説略」（西暦一九〇六年）。

（大学院後期課程学生）

SUMMARY

Position of the Chinese classics of Confucianism in Chang Hsueh-ch'eng (章学誠)

Hidenori KURODA

Chang Hsueh-ch'eng (1738-1801) is Historian in Ch'ing era (清代). In this time, The New Text School of Ch'ing Dynasty (清朝考証学) was prosperous. However, he criticized it and advocated his characteristic theory, which is called as Liu-ching chieh-shih (六経皆史). He is famous for this theory.

He regarded Chinese classics of Confucianism as a history book. But it had not denied the authority which was held conventionally of the classics. For him, the classics carry the thing of an ideal time, and is the origin of all learning and texts. His recognition about authority of the classics did not come from a Confucian scholar's common sense outside.He included the authority of classics held traditionally in the historian as it is. The intention is considered whether to be for granting a historian the authority which exceeds The New Text School of Ch'ing Dynasty.

キーワード　章学誠　文史通義　六経皆史　経書